

ルビュ言語文化教育

教育・研究 > 教育実践 > 先生・専門家の声

「ルビュ言語文化教育：Revue Langue, Culture et Education (RLCE)」は、「個人が主体として生きることのできる、暮らしやすい社会の実現」に寄与することを目的として発行されます。人の「考えていること」は、マニュアルを用意すれば明確になるようなものではなく、具体的な意味のあるコミュニケーション活動の場を通じて明らかになっていくものです。言語文化教育研究所では、どのような社会でも個人が主体として生きていける「ことばの力」をはぐくむ「言語文化教育」を提案し、その普及と発展につとめています。ことば・文化・教育に関する情報・提案などを毎週金曜日にお届けします。

発行周期 ほぼ週刊 最新号 2014/01/17 部数 1,576部 メールマガID 0000079505 発行者サイト 個別ページ

最新号をメルマガでお届けします メールアドレスを入力

規約に同意して 登録 (無料) をお届けします。

[PR]TOEICを150点アップさせた特別レポート。期間限定で無料公開中



2009/11/27 [RLCE091127] ルビュ言語文化教育 第309号

<< 前の記事 最新の記事 次の記事 >>

[2009-11-27] Revue Langue, Culture et Education, n.309
#####

[週刊] ルビュ言語文化教育 (RLCE) ー309号ー

■ 309号 もくじ ■
◇ 研究所より：できるかぎり異端、かぎりなく異端 細川英雄
◇ リレーエッセイ：「考えるための日本語」と「個の文化」の政治的な責任
(1) マルチエッラ マリオッティ

◇ お知らせ：書籍在庫頒布、各種研究会、他

■ 研究所より ■
できるかぎり異端、かぎりなく異端 細川 英雄

記事履歴	発行日	時刻
	2014/01/17	08:00
	2014/01/10	08:00
	2013/12/27	17:53
	2013/12/20	08:00
	2013/12/13	08:00
	2013/12/06	08:00
	2013/11/29	08:00
	2013/11/22	08:00
	2013/11/15	08:00
	2013/11/08	08:00

いる。さらなる議論を期待したい。

(ほ)

■ 300号企画：リレーエッセイ（8） ■□■□■□■□■□■□■□■
 「考えるための日本語」と「個の文化」の政治的な責任（1）
 マルチェッラ マリオッティ

日本学術振興会のおかげで、去年から国際基督教大学アジア文化研究所で日本語教育学を研究している。

去年の秋、細川先生の「考える7/8」と大学院の実習生のクラスに参加させていただいた。以前から細川先生著の本などを読んでおり、その理論が実践にどのように当てはまるのかを探求したかったのである。言い換えれば、日本語が母語ではない私は、学習者としても非常勤講師としても、私が受けてきた伝統的な日本語教授法に物足りなさを感じてきた。

言語教育学者であるPaolo Balboniが強調する、習得における「喜び」の役割に関心をもつ立場から、細川先生のいう「学習者主体」や「個の文化」といった概念に魅力を感じ、日本語教育の中でそれらが具体的にどのようなものを指しているのか、そしてそれらがどこかで「喜び」と結びつくことがあるのかを探求したいと考えたからである。

学生時代の私は、日本の仏教や神道以外のいわゆる「日本文化」に興味を持たず、日本語を習得すること自体を目標していた。高校時代には、イタリア語とは文字や文法がまったく違うギリシア語が憧れの言語であったが、それと同じように、大学時代には、アラビア語でも良いと思いながら、入学する時の大学の諸講座の紹介によって日本語を選び、これに憧れてきた。

当時、言語＝人々がコミュニケーションをするための手段や自分のアイデンティティと関わるものである、ということ、私は認識していなかった。もっと言うと、日本語話者と会話するのは、その（際に使用していた教科書の）内容に興味があったわけではなく、たんに試験のための練習にすぎなかったのである。

インターネットがまだあまり利用されていなかった91年に初めて日本に留学し、初めて母語と違う言語で自分の考えを伝える必要を感じた。日本語はまだ不安で、最初は大学での勉強や試験と全く関連のない英語をしゃべっていた。おかげで、小・中・高校時代に本だけで勉強していても習得できなかった英語を身につけられた。「自分の考えや気持ちを表現できるための言語、相手の考えや気持ちを理解できるための言語」として、さまざまな場面で英語が必要となったからであった。

同じように、そのころから私にとって日本語は、日本語しか話せない、面白そう＝関係を作りたい／考えを知りたい／自分の考えを知ってほしい人とコミュニケーションのための言語となっていたのであり、はじめて一時的な学習から習得へ至ったと思う。（習得となったとはどのような意味かと言われたら、ある知識が自分にとっては忘れがたい、自分のアイデンティティを構築する一

ら習得へ至ったと思う。（習得となったとはどのような意味かと言われたら、ある知識が自分にとっては忘れがたい、自分のアイデンティティを構築する一部になった、ということであると思う）。

参加した「考えるための日本語」は、私の感想では、ある程度上記の留学の経験と似ているが、一時的な他者との関係より、日常的に行われている（はず）「自己分析」の一類でもある。

まず第一、そこにおいて授業（とはいえるのか？）は、その都度その都度の参加者によって形成される。日本語教科書となるのは、それぞれの参加者の「個の文化」やその認識である。

教師はこれから行われるプロセスを紹介し、参加者の合意を得る。この合意はもっとも重要であると思う。なぜなら、個の文化の認識へ導く自己分析や、習得や、他者とのインタラクションは努力を必要とし、また、外国語でそうした自己探求を行うにもさらに努力がいるからである（Schumann, 2006）。非常に強い動機がないとその努力をしないとされるので、合意の維持が必要とされている。

必要性は深い動機となりうるが、日本語を習得したり、その限られた教室の中にいる参加者と話し合ったりするのはそれほど深い動機となる必要性であるとはいえないだろう。英語で話しても自分の考えや相手の考えを交換することはできるし、教室の中にいる人は自分で選んだ話相手でもないから、別に話さなくてもいいからである。

もちろん日本語に興味を持たなければ、選択科目である「考えるための日本語」に参加することはないだろうし、この興味は合意の最初のステップであると思われる。

ただし、合意を維持するには？（つづく）

（Marcella Mariotti・日本学術振興会研究員、現在、国際基督教大学で研修中）